

研究の重みと、その魅力を伝える

中島 国彦

今年はお二人が最初に世に問うた書物を、多くの方に紹介し、顕彰できたことを喜びたい。

服部徹也『はじまりの漱石』は、丹念な文献操作をベースに、漱石の作家的出発を描いた、近年の漱石研究の見事な達成である。全集一巻分のロンドン時代の断片的な「ノート」からではなく、東京帝国大学での「講義」の内容を見据え、全国各地に所蔵されているいくつもの受講者のノートの分析から漱石の文学意識を明らかにし、それらが「倫敦塔」「草枕」「二百十日」「野分」などの初期作品と密接な関係を持つことを分析する。新発見の資料も紹介され、刊行中の岩波の新全集に生かされたことも記憶に新しい。明晰な文章で『文学論』や『英文学形式論』の意味が浮かび上がる論述は、文学研究の一つの目指すべき姿を示すものとして高く評価できる。

河野龍也『佐藤春夫と大正日本の感性』は、成立過程の複雑な『田園の憂鬱』の内実を通して、自己の立脚地を確認するために、書くことで「架空のフルサト」を追い求める春夫の感性を、先ず明らかにする。詩や短編「円光」など、作家出発期の春夫の営為への目配りも十分である。大正九年から、春夫は台湾や中国へ旅行し、その体験から特異な「女誠扇綺譚」や『南方紀行』などが書かれるが、本書の後半でその背景を現地での探索から論ずる部分は、古地図による追究を含めて、読者に感興を与える味わいに満ちている。研究行為が生み出す豊かな魅力をもたらしてくれる。

文学研究のあらたな地平

関川 夏央

服部徹也『はじまりの漱石』『文学論』と初期創作の生成』には驚いた。

漱石の『文学論』は、生意気な若者が高校か大学のときに読もうとして、例外なく途中で投げ出した本だが、その内容がこの『はじまりの漱石』ではじめて腑に落ちた。「狂セリ」といわれたほどの漱石のロンドンにおける勉強ぶりが、何をもちめてのことだったのか、よくわかった。

漱石は英国人研究者、D・フラナガンがいうように世界的存在だと思ふ。現在そのように認識されていないのは、作品中に西洋人の俗耳に入りやすい「日本趣味」がないからだ。そうして日本の国文学者が「いままら漱石？」と訝しむのは、たんに怠慢である。

それにしてもネットは恐ろしいほどの利便をもたらした。著者はOCRをかけた本文検索で中文訳の『文学論』まで参照、近代東洋への影響を検討して漱石の奥深さを実証した。河野龍也『佐藤春夫と大正日本の感性』

「物語」を超えて」も刺激的な本であった。一九二〇（大正九）年は、佐藤春夫が谷崎潤一郎夫人・松子の「譲り受け」に、谷崎の心代わりで失敗する年である。その直前、台湾と福建省廈門に旅した春夫の足跡を著者は追う。当時と現代の地図をつぶさに検討して、春夫の歩いた場所、春夫の見たもの、春夫の心に食い込んだ記憶をさぐるとうとする。一見、マニアの「トリビア」のようである、そうではない。地図と中文の知識に満ちたそれは、たしかにあらたな文学研究の相貌をしめしている。時は無駄に流れなかった。

研究の文体、本のタイトル

兵藤 裕己

服部徹也『はじまりの漱石』は、漱石の『文学論』の成立過程を検討することで、その理論と実作の関係を問いなおした本。東大英文科での漱石の講義を受講した学生たちのノートをもとに、その講義内容を復元し、そこから、漱石本人にとって満足のいく出来ではなかった刊本『文学論』を読み返して、『吾輩は猫』等の初期作品の新たな読みの可能性を示す。漱石論に着実な一歩を刻んだ研究書といえるが、柔軟で読みやすい文章は、研究の文体として新しく、「はじまりの漱石」という標題もじつによい。

河野龍也『佐藤春夫と大正日本の感性』は、佐藤春夫の代表作『田園の憂鬱』に、絵画的感性と文学的教養との亀裂を読みとり、そこに作家としての春夫の原点をみる。植民地台湾に取材した小説や、大正九年の中国南部の旅行記『南方紀行』の成立背景を論じた文章も、いわゆるポストコロニアの常套句に回収されていないのがよい。人口に膾炙した「秋刀魚の歌」や「愚者の死」の背景説明なども、興味ぶかく読ませるが、編集の問題だろうか、タイトルが副題もふくめてわかりにくく、ひと工夫がほしかった。